

身体障害児・者実態調査では、わが国の視覚・聴覚障害者の約半数が65歳以上と、中途障害の占める割合が非常に高くなっています。しかし、積極的に発言し、世論にアピールしているのは若年の人たちです。この特集では、接する機会は多いが、その実態が十分に伝わってきていない中途視覚・聴覚障害者のリハビリテーションを取り上げました。また、今後の重要な研究課題である高次脳由来の視覚障害と人工内耳にもスポットをあててみました。

■ 糖尿病性中途視覚障害者にはどのように対応すればいいのか？

先天性視覚障害者とは異なる心理的衝撃を理解することから始めます。糖尿病の症状と、視覚障害による日常生活上の問題とその対応方法が詳しく分かりやすく述べられています。また、視覚の代償となる他の感覚の利用、視覚障害者用機器も覚えておきたい。（猪野孝子氏ら，693頁）

■ 高次脳由来の視覚障害とは？

Key words に記載されている言葉は知っていても、その内容を十分理解している人は少ないのでは？ 注意力障害として見過ごしてしまっていたのではと反省し、画像も含めたトータルな視点での診断の必要性を再認識させられることは間違いありません。（喜多也寸志氏，699頁）

■ 老人性難聴と補聴器の関係は？

老人性難聴の聴覚リハビリテーションは補聴器の管理、装用指導が主となります。これは理解されていても、はたして実行されているのでしょうか？ 老人性難聴者の心理学的特徴を理解していなければ、補聴器の性能がアップしたのに十分に使いこなせません。本論文はリハビリテーション医療関係者にぜひ読んでいただきたい。（岡本牧人氏，705頁）

■ 人工内耳とは？

研究開発途上にある人工内耳とはどのようなものかを理解することの必要性、それは今後、応用症例が増加したときに、リハビリテーション関係者の対応を考えるためではないでしょうか。筆者は音声知覚能力の決定因子の基礎的研究の必要性をあげています。（伊福部達氏，711頁）

■ 視覚・聴覚障害者の社会・職業生活はどう変わってきたか？

18歳未満の児童が減少し、18歳以上の成人、しかも65歳以上の高齢障害者が増加しているのが現状です。視覚・聴覚障害者のコミュニケーション、移動、日常生活動作における問題点と、リハビリテーション医療関係者の留意点がわかりやすく解説してあります。また、職業生活においては、就業率の最も低い視覚障害、最も高い聴覚障害どちらにおいても就労職種の拡大の必要性が述べられています。（植村英晴氏，716頁）